

拝啓 今年も早や4月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、桜も終わり、ハナミズキの花が青空をバックにきれいに咲いています。

今回は、小西芳之助先生の『ガラテヤ人への手紙講解説教』からの引用の第10回目で、今回のエンカウンターの3頁「福音とは、イエス・キリストの贖い」には、次のように書かれています。

「福音」とは、イエス・キリストの贖い

「永遠の生命は、キリストの贖いによってだけから来ます。それ以外に生命を得る方法はありません。「福音」を簡単に言えば、イエス・キリストの贖いであります。これによって、東を向いていた我々が、西を向くようになります。東を向いていて、どんなに善行を積んでも、そんなものは問題ではありません。西を向かなければいかん。よろしいですか。西を向けば、その人の顔が変わって来ます。我々、何十年教会に来ていても、東を向いておれば、それは滅びに至ることになります。まず「西を向くこと」が必要です。永遠の生命の方を向く。我々はこの「永遠の生命」のために毎日を生きているのであります。そうなってきたら、それをクリスチャンと言う。永遠の生命以外のこと、学問、芸術、道德、その他人間にとってどんな良いもの、必要なものであっても、それは、キリスト教本来のものではありません。キリスト教本来のものは「永遠の生命」であります。これが分かっている牧師はきっと少ないでしょう。」

小西先生の説教では、福音とは、「イエス・キリストの十字架の贖い」であるということ、繰り返し繰り返し説かれています。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

**小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』4月3日**

「神の義を受くる鍵

ロマ書3章24節にいわく「彼等は価なしに神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである」と。

この節を読み、書き、また口で言いなさい。そして、記憶するように。そして、その上、これについて毎日考えなさい。深い感謝をもってこれが分かるまで。その時こそ、初めて神の義があなたのものとなる。

ルッターの言ったのは、誠なるかな、「ここにロマ書および全聖書の中心がある」と。この重要な節に信仰に関する字が一字もない理由がお分かりであろうか。」

**新渡戸稲造先生『一日一言』3月22日**

「西暦1837年の今日、ドイツの文豪ゲーテが世を去った。才能あらゆる方面に向いて卓絶せる彼は、常に「急ぐなかれ、たゆむなかれ」の主義を守りて、かの大業を残した。なすべきこと、なしたき事を数うれば、気のみ忙しく何より始めんかと迷うばかりにして、

その揚げ句は何もせずに一生を終わるのみ。終生の業は、その日その日の義務を完了するより他にない。」

### 松下幸之助先生『続・道をひらく』「事あるたびに」

「いろいろのことがあって、よくないと思うこともいろいろあるけれど、一見よくないと思うことも、それはいつかは必ず良きことに結びつき、時至れば一転して発展への道にむすびついていくのだという思いに立つことは、これはお互いにとってそれほどの難行ではなかろう。すなわち、事あるたびにすべてがよくなるという思いを、素直に何度もかみしめて、たゆまぬ歩み続けることである。これはまた自然の理に則する道でもあろうか。

この文章は、ロマ書8章の「万事が益となる」という聖書の言葉とよく似ている。

### 内村鑑三先生『続1日一生』3月28日

「シーリー先生は一日、私を呼んで教えてくれた。

内村、君は君の内をのみ見るからいけない。君は君の外を見なければいけない。なぜ、おのれに省みることをやめて、十字架の上に君の罪をあがないたましいイエスを仰ぎ見ないのか。君のなすところは、小児が植木を鉢に植えて、その成長を確定（たしか）めんと欲して、毎日その根を抜いてみると同然である。何ゆえに、これを神と日光とにゆだね奉り、安心して君の成長を待たぬのか。

先生のこの忠告に私の靈魂は醒めたのである。私はこの時、初めて信仰の何たるかを教えられた。信仰は読んで字のごとく信ずることであって、働くことではない、私は修養又は善行によって救われるのではない、神の子を信ずるによって救われるのであるとは、シーリー先生がはっきりと私に教えてくれたことである。」

### パークレー先生『ウイリアム・パークレイの一日一章』イースター（復活節）

「彼はよみがえりたまえり！

我々が人生に対処し得るのは、イースター信仰、復活していまなお生きたもう主に対する信仰によってである。

というのは、イエス・キリストが復活していまなお生きておられることを信ずるとするならば、当然、すべての生は彼のおんまえにおいて営まれていること、わたしたちがひとりではけっしてないこと、またキリストなしに努力したり、悲しみを忍んだり、誘惑に直面したりする必要のないこと、を信じないわけにはいかないからである。

われわれが死に直面し得るのは、イースター信仰、復活していまなお生きたもう主に対する信仰によってである。

イースター信仰は、一年のある時期にだけ考えることではなく、クリスチャンがそれによって毎日生き、それによって最後に死ぬ（それも再び生きるためだが）そのような信仰でなければならない。」

## カウマン先生『荒野の泉』3月9日

重荷という言葉は聖書の欄外に「神の汝に与えたもうもの」とある。聖徒の重荷は、神の与えたもので、もろもろの重荷は人をして神を待ち望ませる。そしてそれがなされる時に信頼の魔術によって主には二つの翼に変わり、重荷を負わされた人がわしのように翼を張ってかけのぼるのである。

4月6日（土）には、長男の運転するレンタカーで、御殿場にある富士霊園の和枝の墓参りに行ってきました。墓参りの後、桜並み木の下で、シートを広げてサンドイッチを食べました。石館守三先生、基さんなど石館家のお墓にも参りました。

4月13日（土）小西先生のカセットテープのCD変換事業の最終回として、「年末・年頭所感」CD16枚のセットが長野県の池田エコーから届いたので、小分けにして13人の方に宅急便で発送しました。この事業は、3年前岐阜県大津市にお住いの吉川京子さんから依頼されて始めた事業でしたが、毎回6人から15人の方の注文を受けて、小西先生のパウロ書簡講解説教の全部をCDに変換することが出来ました。御注文の皆様ありがとうございました。

新型コロナについては、だいぶ少なくなりましたが、電車の中とかスーパーでは、まだマスクをされている人が半分ほどおられるように思います。マスク、手洗い、うがいなどは、必要と思われるときは実行されて、十分ご注意ください、コロナやインフルエンザにかからないように注意されるよう、祈り申し上げます。

2024年4月21日

山口周三

エンカウンターの読者各位